

第十回



富士山大賞

二〇二五 受賞作品歌集

大賞

富士山のでっぱりもちゃんと描くひと
結婚はがきの投函は明日

埼玉県 直

準大賞

向ひ座の富士に四月のかさね雪
鵲鴿しきり黒き尾を振る

山梨県

渡邊 忠子

冬晴れのキッチン窓の端っこに
いと愛らしき吾の手より富士

東京都

奈良岡 歩

岡井隆記念賞
(学生最優秀賞)

見上げれば 富士が見えたる感激を
縄文人も持ってた日本

東京都 谷藤 春輔

優秀賞

富士知らぬ母の手編みのセーターで空を飛ぶほらあれが富士山よ 長崎県 中村 縁衣子

富士山に叱られながら育ちおりと山梨生まれの母はつぶやく 静岡県 金澤 桂子

十三年富士に見られて富士を見て夫を看取りていま娘と二人 山梨県 藤井 鶴子

思い出の富士山五合目を馬に 乗せてたのしき夏休みあり 和歌山都 助野 貴美子

晴れてたらあそこあたりと指さして教えた富士をひとり眺める 埼玉県 島崎 よみ

降り積もるナノのレベルの生きづらさ白の高嶺が遠く見ている 東京都 風野 瑞人

富士山麓オウム鳴かねど御来光見て明日からは数学の塾 東京都 後藤 克博

見える日も見えない日にも聳え立つ富士に抱かれ盆地に生きる 山梨県 駒井 春美

車窓から見た赤富士よ約束を忘れずに今過ごしています 千葉県 林 英美子

富士山がわずかに見えていつまでも渡れずにいる横断歩道 神奈川県 おのめぐみ

富士山を思いうかべてカレー食うなぜかカレーがあう富士山 三重県 相川 高宏

学生優秀賞

笠雲を持った富士山と明日の天気予報を競うてるてる坊主 山口県 横道 玄

佳作

足攣りて先に下山の級友は登る我らへエールを呉れぬ

雪の飛ぶ富士の山頂ふるさを越ゆる一瞬車窓に祈る

花嫁が式場に向け歩を進め窓に一礼富士をながめて

かげろふにみずら髪なる幻の人の仰ぎし不二は火を噴く

遠富士と菜の花と海半島の坂の辺にして甚く清しも

込み合へる東京タワーの展望台富士に見らるる帽子の私

風に乗り富士の嶺巡る大とんび鳥となりたる子規にあらずや

坂道を塔婆右手にのぼりゆく墓の上には冬枯れの富士

塩香る砂山からの富士の山ながらへば又いずこより眺めん

富士山を新中川に仰ぐ日は迷わず吾を肯定できる

西尾 嘉浩

安藤 喜子

伊藤 敦

高畑 和伎子

前橋 誠

内山 正則

林 充美

小俣 喜治

芳ヶ野 良子

二ツ森 京子

父の日に誰から何もことばなくさびしさにふと富士を仰ぎみる
ずぶ濡れて御山神輿を担ぐ衆すすき祭りの夕暮れを練る

富士を背に逆立ちの子の年賀状爪先の上に宝永山あり

立ち漕ぎで御坂を超えて午後三時富士を仰ぎて湖畔に立てり

莓狩の外国人がまた一人ハウス出て撮る雪の富士山

ひと夏の青空なべて呑み込むや白馬大池深々と藍

古代より北に富士置く伊豆の人こころ丈夫に方位となせり

E席で 発車後まずは タイマーオン 45分後 カメラを起動

火焰土器で富士の裾野に栗を煮る 一万年後も空は青いか

スクランブルのF15機のパイロット 帰りは富士に敬礼をして

大蛇なる胎潜るごとくトンネルを出づれば湖に雪富士が裾曳く

東京のビルとビルとの狭間から今朝も富士の嶺くきやかに見ゆ

富士見れば 日の出の光 思い出ず不死身と思えた若き日妻と

池谷 博文

渡邊 恵子

宮川 良子

市之瀬 進

朝倉 正敏

田保 鏡子

小川 和子

中野 稜子

國枝 かおり

井上 由美

星谷 孝彦

木立 徹

石井 大

美しい眺めのシエアを託された「富士見」でのぞむ富士は端っこ

山路 淳子

富士山にナビゲーションをセットしてみどりの風と水を飲み干す

志水 麻衣子

赤人の詠みし深雪は濾され来し富士湧水のコーヒー美味し

大和 嘉章

富士山が見エマスと友の差す窓に富士は小さく貴石のやうに

岡本 千晶

うちからは右の裾野がちよっと見えるどこにいたっておんなじ今日を

泉 茫人

【選者】

選考委員

穂村 弘（日本経済新聞歌壇選者）

東 直子（東京新聞歌壇選者）

三枝浩樹（「沃野」編集発行人）

外国語特別審査員

荻田吉夫（元ニューヨーク総領事 元宮内庁式部官長）

山本忠通（元国連事務総長特別代表 事務次長）

富野光太郎（国際タン力協会会長）

木下 晶（国際タン力協会編集委員）

【開催団体】

富士山大賞実行委員会

NPO法人 富士山自然文化情報センター

NPO法人 富士山クラブ

世界連邦文化教育推進協議会

全国富士講睦会

一般財団法人 徳大寺文庫

【後援】

國學院大學 富士山世界遺産国民会議

【映像協力】

富士山世界遺産センター 山梨県 ロッキード中

【表彰式】

令和8年2月11日（水・祝）14時から

【会場】

明治記念館